

## ジェイソン クルス 米国出身の元司祭

:

明: 宗教の をさまよっていた米国人司祭が、イスラ ムを受け入れます。

目: [事新改宗者ムスリムの逸 者と宗教的 威](#)

より: Jason Cruz

日 05 Oct 2015

集日 05 Oct 2015

アルハムドゥリッラ（神に称えあれ）、私はアッラ の祝福により2006年からイスラ ムという り物を授かりました。私の んだ道のり、そしていかにアッラ が私を祝福してくれたかについて きつづることを依 されたとき、私はためらいました。私は、他の人たちがイスラ ム改宗について公表する に得られる 判に有 天になるのを てきたからです。私はそれと同 の は望んではいませんでした。

ですので、私はこの改宗 を私自身の逸 ではなく、アッラ の きかけによるものとして て欲しく、アッラ の慈悲と 大きに焦点を当てたいと思います。インシャ アッラ 。アッラ のご慈悲なしにイスラ ムに入信する人はおらず、本当に重要なのは改宗者ではなく、アッラ による きかけに他なりません。

私は名目上はロ マ カトリック教徒として、ニュ ヨ ク州北部に生まれました。母はロ マ カトリック教徒、父は 老派教会の信者で、 婚のためカトリックに改宗しました。

私たちは日曜日に教会へ行き、公教要理、初 体、そしてロ マ カトリック教徒としての 信礼といった 式を受けてきました。私は若くして、アッラ からの呼びかけを感じていました。私はその呼びかけをロ マ カトリック教の司祭になることとして解 し、そのことを母に告げました。喜んだ母は、私を地元の教区の司祭に合わせに行きました。

幸か不幸か、その司祭は自身の召命について 足しておらず、 者は志さないよう私に助言しました。私は落ち みました。もし彼の反 がポジティブなものであったなら、その 私の人生がどれ程 なるものになったか分かりません。

アッラ の呼びかけに する失望、そして私自身の愚かさから、10代だった私は反 の方向へ へんでいきました。私が7 のときに家庭は崩 し、 婚 に去った父の不在に私は苦しみました。

15 のときから、私は全宇宙の主よりもナイトクラブやパ ティ に 味を持つようになりました。私は弁 士になり、その 政治家になってマンハッタンのペントハウスを所有し、社交界で一 有名になることを ました。

高校を 秀な成 で卒 した私は、一旦大学に入学しました。しかし、私自身のねじれた 心により、学位を取得せずに大学を中退し、（ 在に至るまで居住している）アリゾナ州に引っ越すことになりました。

私はそのことを今でも 悔しています。アリゾナに移った私の状 はさらに 化しました。故 の友人たちよりもさらに酷い人々と付き合いだした私は、麻 に手を染めました。学のない私は底 の仕事に就き、麻 乱交 ナイトクラブに を やし けました。

その当 、私は初めて一人のムスリムと出会いました。彼は留学生として 地の大学に通っていた 前の良い人物でした。彼は私の女友 の一人と付き合っており、一 にナイトクラブやパ ティ に通ったものでした。私は彼とイスラ ムについて したりした ではありませんが、彼の文化について し、彼はそれに喜んで答えてくれました。イスラ ムの は上がりませんでした。私はここでも、もし彼が 践的なムスリムだったら人生はどうなっていたのかと考えたりします。

こうした いライフスタイルは数年 きましたが、その はここでは 々と述べません。私の知り合いの何人かは亡くなり、私は刃物で刺され したり多くのトラウマを抱えましたが、これは 物の危 性を警 する 事ではありません。

ただ、ここでそれらに言及するのは、たとえいかに墮落しようとも、インシャ アツラ、アツラ はあなたをそこから救い出すことができるのだということを言いたいからです。では、私が麻 から足を洗ったところまで早送りしたいと思います。麻 中毒から脱出する 程の一つとして、「より高い存在」との が げられます。

大半の人にとって、それは神、もしくは神格性を持つものに するものです。私は きにわたってアツラ との を失っていたため、より高い存在を探し求めるようになりました。残念ながら、当初は真理を探し出すことはできませんでした。私はそれによる自分に起きた苦 に する 明に 得がいったことから、ヒンズ 教に改宗しました。

私はそれにどっぷりとのめり み、ヒンズ 教の名前に改名すらしめました。それによって麻 を止め、より良い方向に人生を めることができるようになったことについては感じています。やがて、私は再びアツラ による影 力を感じ始めました。そうして、私にとってヒンズ 教は真の道ではないことが示されました。

アツラ は私がヒンズ 教を 教するよう いたため、私はキリスト教に回 し始めました。私はそれがアツラ の きであると感じたため、ロ マ カトリック教会に して司祭になる手 きをしたところ、彼らはニュ メキシコ州の修道院で修行する 会を提供してくれました。その には私が住んでいたアリゾナ州に家族（母と兄妹）も引っ越してきており、多くの しい友人たちもいました。

言うまでもなく、私には心の ができていませんでした。ニュ メキシコでの修行の代わりに、在宅で神学を学びつつ 者として任命してくれるカトリックの独立教会を つけました。このカトリックの独立教会は、私がそれまでの人生で育んできたリベラルな から魅力的でした。私は彼らの神学プログラムに参加し、2005年に 者として任命されました。

司祭となった私の最初の任 は、宗教 でした。私に せられた は、フェニックス都市 の なる 宗教の について学び、教会の代表者として宗教 の平和のメッセ ジを えることでした。

キリスト教の の大半は、勉強したため知っていました。ユダヤ教やその他の の宗教については勉強し直しました。私は、仕事を持つ 者を意味する「司祭」という に就いており、教会外では医 に就 していました。

はモスクと同じ道にありました。私はこれが、宗教 のためにイスラ ムを学ぶ良い 会 だと思いました。モスクに行くと、非常に 切な兄弟たちと出会い、アリゾナ州テンピ にあるモスクを 介されました。

私はまた、 人的にもイスラ ムについて むようになり、その内容から感 を受けていまし た。そのとき、アッラ は私をしっかりと掴んでいましたが、私はまだ 付いていません でした。テンピのモスクへ行くと、アフマド アル＝アク ムという素晴らしい教 と出会 いました。

ムスリム アメリカン ソサエティの地域管 者であるアル＝アク ム氏は、一般のあらゆる 信仰を持つ人々に かれたイスラ ム初 クラスを教えており、私はそれに参加しました。 クラスへの参加を重ねる度に、私はイスラ ムが真理であることが分かり始めました。 テンピ モスクのアフマド シュケイラ ト の元でシャハ ダ（信仰 言）をするまでにそれほ ど はかかりませんでした。アル＝アク ム氏とシュケイラ ト はどちらも素晴らしい人物 で、彼らがいなければイスラ ムへの改宗をしようとは思わなかったでしょう。私は教 会での を辞任し、それ以来ずっとムスリムです。アルハムドゥリッラ（アッラ に称え あれ）。

イスラ ムを受け入れてからの私の人生は、 的に改善しました。当初、私の家族は私が 司祭 を去ったことについて悲しみ、イスラ ムを理解するどころかそれを恐れていまし た。しかし、私の幸せな 子や、クルア ンとスンナの履行に する 人的な努力など、私が イスラ ムから受けた影 を た家族は、それを良いものト なすようになりました。

アル＝アク ム氏は、改宗者にとって最初の1年が最も困 なものであることを知っていま した。そうした困 さを させるため、彼は私がコミュニティの活 に多く携わり、 山の 践 的な同胞と出会うよう尽力してくれました。改宗者が成功するかどうかは、他のムス

リムたちとの良い出会いに委ねられていると言っても 言ではありません。

新改宗ムスリムを孤立させてしまうと、不安に ったり信仰心があっという に衰えたりする 合があります。そのため、 者の中でもし改宗者を知っている方がいれば、最低でも3日に1回は会いに行っておいて下さい。私はムスリムになったおかげで、 スキルを上 させることができました。私はアルコール 物乱用、HIV、肝炎などを予防するプログラムの管理人になることができました。

私はムスリム アメリカン ソサエティだけでなく、アリゾナ州の他のムスリム青年プログラムのボランティアにもなりました。また、最近ハダをしたテンピ モスクの役 として推 されました。アルハムドゥリッラ 、それは が私の本当の友で、 がそうでないのかも明白にしてくれました。

今では非ムスリムの友人よりもムスリムの友人が多くなりました。ムスリムの同胞たちとは、これまでの人生で育んだこともないような、 重な友人 を き上げることができました。インシャ アッラ 、もしもアッラ がお望みなら、イスラ ムのため、そして私がする共同体のため、留学してイスラ ム法を勉 しようと思っています。これらすべてはアッラ の恩 によるもので、 ちがあるとすれば私自身からのものに他なりません。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/2535>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。